

聖書における「愛」と「誠実」

樋口 進

Higuchi Susumu

夙川学院に短期大学が設置されたのは、1965（昭和40）年1月25日であり、同年4月20日に開学式を挙げて、教育が開始された。このとき、短大の教育理念は特には定められなかったが、戦後夙川学院が教育理念とした「キリスト教精神」は前提であったようである。しかし、礼拝とかキリスト教の授業科目を配置するということにはなかった。ただ、入学式や卒業式が礼拝形式で行われ、またクリスマス行事などもあり、ここにわずかに「キリスト教精神」が生きていたとすることができる。『九十年史』には、二代目学長の高木俊蔵の文として次のように記されている。「夙川学院は古くから宗教的情操教育を重視し、短大も創設以来この伝統を守ってきた¹。」そして、短大の「教育理念」としては、1980（昭和55）年に次のように定められた。すなわち、「愛と誠実」「清新な学識」「清楚にして優雅」である。これは、短期大学教授の増谷くらの提案をもとにして専門委員会、教授会で検討したものということである²。『百年史』には、次のようにある³。「第一項では女性といわず、人間として基本的に求められる項目が述べられ、第二項では、教養豊かにして、専門とする学識に秀で、技能に熟達した女性が、社会の発展に寄与することを願い、短期大学が教授するものは、諸学・技術の基礎から、現代におけるその展開・応用に至ることを示唆している。そして学生が、自発的に研鑽し、探究心を深めてくれるように願っているのである。第三項では、本学の学生が歴史と伝統に育まれた夙川学院の構成員としての自覚と誇りを持って、しかも学生らしく清楚であって、言動優雅であることを希求しているのである。」この中で、第一項の「愛と誠実」に関しては、夙川学院が戦後教育理念としたキリスト教思想を反映したものと思われる。イエス・キリストは、最も重要なこととして、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」ということと、「隣人を自分のように愛しなさい」ということを教えた（マタイによる福音書 22:37-39、マルコによる福音書 12:29-31）。また、イエス・キリストは、「正義、慈悲、誠実を最も重要なこととして行うべきだ」と教えている（マタイによる福音書 23:23）。以下、聖書において「愛」と「誠実」がどのように言われているかについて検討したい。

キーワード：教育理念、愛、誠実、聖書、イエス・キリスト、真実、パウロ、慈しみ

¹ 夙川学院九十年史編集委員会編『夙川学院九十年史』学校法人夙川学院、1971年、243ページ。

² 夙川学院百年史編集委員会編『夙川学院百年史』学校法人夙川学院、1986年、478ページ。

³ 同 479ページ。

1. 聖書における「愛」について

夙川学院の教育理念は、寄附行為において「イエス・キリストの教えを根本とし正義と平和を愛する徳の高い人を育てることを目的とする」と定められている。それでは「イエス・キリストの教え」とは何であろうか。それはいろいろあるが、その中心は「愛」ということが言えるであろう。最も有名なイエスの教えは、前述のように、マタイによる福音書 22 章 37-39 節（マルコによる福音書 12:29-31）であろう。すなわち「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」と「隣人を自分のように愛しなさい」である。そしてイエスは、「この二つの戒めに、律法全体と預言者とが、かかっているのだ」と言われた⁴。「律法全体と預言者」というのは、当時成立していた（旧約）聖書の全体のことである。そこでイエスの主張されたのは、聖書全体で最も重要なのは、「心から神を愛する」と「自分のように隣人を愛する」ということである。しかし、後述するように、この二つの教えは、イエスのオリジナルの教えではなく、旧約聖書からの引用である⁵。そして、この「神を愛する」と「隣人を愛する」を教育理念として掲げているミッションスクールは多い。例えば、名古屋学院のスクールモットーは「敬神愛人」であり、神戸女学院は「愛神愛隣」であり、弘前学院は「畏神愛人」であり、九州学院は「敬天愛人」である。いずれも、マタイによる福音書 22 章（マルコによる福音書 12 章）のイエスの教えから来ている。

イエスの隣人愛についての教えで最も有名なのはルカによる福音書 10 章 25-37 節の「憐れみ深いサマリア人」の譬えであろう⁶。あるユダヤ人が旅の途上山道で強盗に遭い、瀕死の重傷を負った。そこに 3 人の人が通りがかったが、最初に来た祭司はその倒れている人を見たが、助けずに通り過ぎて行った。次に来たレビ人も同じように見て見ぬふりをして通り過ぎて行った。三番目に来たのは、普段ユダヤ人

とは仲のよくなかったサマリア人であったが、彼は倒れている人を見て、憐れに思い、助けたというのである。このたとえ話をした後、イエスは律法の専門家（ユダヤ教の指導者）に、「誰が強盗に襲われた人の隣人になったと思うか」と問うと、その人は「その人に思いやりを尽くした人です」と答えた。それに対してイエスは「行って、あなたも同じようにしなさい」と言われた。このイエスの「隣人愛の教え」は、多くの影響を与え（日本のミッションスクールの教育理念にもあるように）、欧米には Good Samaritan House（善いサマリア人の家）というホームレスの人などに宿や食糧を提供している施設もある⁷。しかし、この隣人愛の教えは、前述のように、イエスのオリジナルの教えではなく、旧約聖書に既にあつたものである。すなわち、レビ記 19 章 18 節には次のようにある。「復讐してはならない。民の子らに恨みを抱いてはならない。自分のように、隣人を愛しなさい。私は主である。」しかし、当時のユダヤ教の指導者たち（譬えでは祭司やレビ人として登場）でさえ、この教えを実行していなかったことをイエスはこの譬えで皮肉ったのである。

さらにイエスは、マタイによる福音書 5 章 44 節において「敵を愛しなさい」と教えている。しかし、この「愛敵の教え」は人間には非常に困難であろう。殆ど不可能と言っているであろう。しかし、イエス自身はこれを行っている。すなわち、十字架にかけられた時に、自分を十字架にかけた人々のために祈ったのである。ルカによる福音書 23 章 34 節には次のようにある。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは自分が何をしているのか、分かっていないのです。」しかし、この愛敵の教えも、イエスのオリジナルの教えではなく、既に旧約聖書にその萌芽があると言うことができる。すなわち、出エジプト記 23 章 4-5 節には、次のようにある。「もし、あなたの敵の牛、あるいはろばが迷っているのに出会ったならば、必ずその人のもとに返さなければならない。もし、あなたを憎む者のろばが荷物の下に倒れているのを見たならば、放置しておいてはならない。必ずその人と一緒に助け起こしてやらなければならない。」このように「愛敵」とは言えないかも知れないが、敵が困っている場合は助けるべきだ、と言われている。

⁷ 例えば、<http://www.goodsamaritanhouse.org/> 参照。

⁴ 聖書の引用は、すべて、昨年刊行された「聖書協会共同訳」からである。

⁵ すなわち、前半は申命記 6 章 5 節からの、後半はレビ記 19 章 18 節からの引用である。

⁶ 「聖書協会共同訳」の見出しによる。「新共同訳」では、「善いサマリア人」という見出しであり、この方が一般的である。英語でも“The Good Samaritan”が一般的である。

新約聖書において、イエスの教え以外でもこの「愛」についてしばしば主張されている。パウロは、その手紙において、この「愛」をしばしば主張した。例えば、ローマの信徒への手紙 12 章 9-11 節には、次のようにある。「愛に偽善があってはなりません。悪を退け、善に親しみ、兄弟愛をもって互いに深く愛し、互いに相手を尊敬し、倦むことなく熱心に、霊に燃え、主に仕えなさい。」ここで、「愛」と訳されている語は、原語のギリシア語ではアガペーであり、「兄弟愛」と訳されている語は、フィラデルフィアである。ギリシア語には、「愛」を意味する語が4つある。すなわち、友好的な愛を意味するフィラデルフィア（フィリア）、「尊重する」を意味するアガペー、性的な意味での愛を意味するエロース、「満足する」を意味するステルゴーである⁸。その中で、新約聖書に出る語は、フィラデルフィアとアガペーだけである。中でも特に重要なのは、アガペーである。これはしばしば、神の人間に対する愛を表し、一方的に与える愛、無償の愛を意味する。これを最もよく表している言葉は、ヨハネによる福音書 3 章 16 節の次の言葉である。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」ここで「独り子を与える」とは、一番大切なものを与えるということで、無償の愛を表している。また、ヨハネの手紙一 4 章 10 節には、次のようにある⁹。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪の贖いとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」いずれも、神の人間に対する無償の愛を言っている。そして、人間もこの神の愛にならって、他の者を愛することが勧められている。続きのヨハネの手紙一 4 章 10 節では、「愛する人たち、神がこのように私たちを愛されたのですから、私たちも互いに愛し合うべきです」と勧められている。ここで使われている「愛」はすべてアガペーである（動詞「愛する」はアガパオー）。パウロの書いたコリントの信徒への手紙一 13 章は、「愛の賛歌」と言われ、このアガペーの愛とは、どういうものかということが言われている。すなわち、次

のように言われている。「たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、私は騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ私が、預言する力を持ち、あらゆる秘義とあらゆる知識に通じていても、山をも移すほどの信仰を持っていても、愛がなければ、無に等しい。また、全財産を人に分け与えても、焼かれるためにわが身を引き渡しても、愛がなければ、私には何の益もない。愛は忍耐強い。愛は情け深い。妬まない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わない。不義を喜ばず、真理を共に喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びません。しかし、預言は廃れ、異言はやみ、知識も廃れます。私たちの知識は一部分であり、預言も一部分だからです。完全なものが来たときには、部分的なものは廃れます。幼子だったとき、私は幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていました。大人になったとき、幼子のような在り方はやめました。私たちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ていますが、そのときには、顔と顔を合わせて見ることとなります。私は、今は一部分しか知りませんが、そのときには、私が神にはっきり知られているように、はっきり知ることとなります。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残ります。その中で最も大いなるものは、愛です。」

イエスにしても、ヨハネにしても、パウロにしても、「愛」についての教えは旧約聖書の思想の影響であると思われる。それでは、旧約聖書では「愛」についてどのように言われているであろうか。前述のように、マタイによる福音書 22 章 37-39 節（マルコによる福音書 12:29-31）のイエスの教えは、旧約聖書の申命記 6 章 5 節とレビ記 19 章 18 節からの引用である。しかし、違うコンテキストで言われていた二つの言葉を一つに合わせて、これが聖書で一番重要な教えだとしたのは、イエスの独自性である。もっとも、ルカによる福音書 10 章 27 節では、この言葉は律法の専門家が言った言葉とされており、イエス以前にユダヤ教において、この二つの教えが一つにされていた可能性もある。

さて、旧約聖書で「愛」と訳されている原語のヘブライ語は、アハバーとヘセドである。前述のイエスが引用したとされる申命記 6 章 5 節とレビ記 19 章 18 節で「愛しなさい」と言われている語は、アハ

⁸ A・ベルレユング、C・フレーフェル編『旧約新約聖書神学事典』山吉智久訳、教文館、2016年、98ページ参照。

⁹ ヨハネによる福音書の著者もヨハネの手紙の著者も同じヨハネと考えられている。

バーの動詞の形（アハバー）である。

アハバーは、親が子を愛することに現れるところの自己犠牲的な愛を意味するが、これは神の愛（ギリシア語のアガペーに相当する）を最もよく表している¹⁰。アハバーを神の愛を表す語として用いたのは、預言者ホセアが最初であった。ホセアは、神の愛を妻から裏切られてもなお彼女を愛し続ける夫の愛として語る物語において、神のイスラエルの民に対する愛を言い表した。

神がイスラエルを愛するのは、イスラエルに愛される価値があるからではなく、神が無条件に一方的に愛したのである。申命記 7 章 7-10 節には、次のようにある。「あなたはまさに、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は、地上にいるすべての民の中からあなたを選び、ご自分の宝の民とされた。あなたがたがどの民よりも数が多かったから、主があなたがたに心引かれて選んだのではない。むしろ、あなたがたは、どの民よりも少なかった。ただ、あなたがたに対する主の愛のゆえに、また、あなたがたの父祖に誓われた誓いを守るために、主は力強い手をもってあなたがたを導き出し、奴隷の家、エジプトの王ファラオの手から、あなたを贖い出したのである。」この神の愛は、選びと同意義に用いられる場合があって、神は多くの民族の中からイスラエルを選んで契約関係に入ったと言われており、ここに愛がある（申命記 7:6-8 参照）。そして、イスラエルはこの無償の愛に答えて、神を愛することが求められるのである。申命記 6 章 5 節には次のようにある。「あなたは、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい。」（申命記 10:12, 13:4, 列王記下 23:25 も参照）。

そこで、イスラエルの民が神を愛する時にもこの語（アハバー）が用いられる。ホセアの影響を受けた預言者エレミヤは「私はあなたの若い頃の誠実（ヘセド）を、花嫁の時の愛（アハバー）を・・・覚えている」と言う（2:2）。ここで「私」は神であり、「あなた」はイスラエルの民であり、イスラエルの民は初期の時代には神を純粹に愛していたということが回顧されているのである。

アハバーはまた、男女の愛にも使われ（士師記 16:4, 雅歌 8:6 等）、隣人を愛する時にも使われる

（レビ記 19:18, 申命記 32:35, サムエル記下 13:22, 28, 詩編 103:10, 箴言 20:22, ナホム書 1:2 等参照）。また、人間が「善を愛し」（アモス書 5:15）や「心の清さを愛する」（箴言 22:11）という時にも使われる。

「愛」を表すもう一つのヘブライ語はヘセドである。この語は、旧約聖書では「愛」の他に、「慈しみ」（創世記 19:19, 出エジプト記 15:13,34:6, 詩編 5:8 等）、「忠実」（サムエル記下 16:17 等）、「誠実」（エレミヤ書 2:2 等）とも訳され、幅の広い意味合いを持っている語である。

ヘセドは、語源において「力」を意味した¹¹。詩編 62 編 13 節には次のようにある。「わが主よ、慈しみはあなたのもとにあり／あなたは、その業に応じて一人一人に報いをお与えになります。」ここで「慈しみ」と訳されている語は、ヘセドである。ここではヘセドは、神から来る力を意味している。ヘセドはまた、連帯責任や社会的義務をも意味する¹²。ホセア書 6 章 4 節で「あなたがたの慈しみ（ヘセド）は朝の霧、はかなく消える露のようだ」と言われているが、ここでホセアは、イスラエルが神との間に結ばれた契約に対する責任、神に対する応答としての義務が雲の如く消え失せている現状を批判しているのである。

また、申命記 7 章 9 節に「ご自分を愛し、その命令を守る者には、幾千代にわたって契約と慈しみを守る、信頼できる神であることを知らなければならぬ」とあるが、神を愛することは、神との契約にふさわしいあり方をする事、すなわち神の命令を守ることを意味するのである。

また、ホセア書 4 章 1 節には「この地には真実（エメト）も慈しみ（ヘセド）もなく」とあるように、ヘセドとエメトが同意語的に用いられている¹³。

2. 聖書における「誠実」について

マタイによる福音書 23 章 23 節においてイエスが教えた「誠実」は、原語のギリシア語ではピステイ

¹¹ 同上 2 ページ参照。

¹² Koehler, L. and Baumgartner, W., *The Hebrew & Aramaic Lexicon of the Old Testament* (Brill) のヘセドの項目参照。

¹³ エメトは、また「誠実」とも訳されうる。従って、聖書においては「愛」と「誠実」は、重なり合う意味をもつ。

¹⁰ 『新聖書大辞典』（キリスト新聞社）の「愛」の項目（執筆者は山崎亨）参照。

スである。この語は「誠実」の他に「信仰」や「真実」とも訳される¹⁴。パウロの書いたローマの信徒への手紙3章3節とコリントの信徒への手紙二1章12節では「神の誠実」と言われており、「誠実」は何よりも神の性質とされている。従って、神が誠実であるように、人間も誠実であるべきだ、という勧めである。パウロはまた、キリスト者の身につけるべき徳として、次の9つのことを勧めている。すなわち、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制である(ガラテヤの信徒への手紙5:22)。ここで「誠実(ピスティス)」がキリスト者の身につける徳の一つとされている。ヨハネもまた、この「誠実」をキリスト者の身につける徳として主張している。ヨハネの手紙三1章5節には次のようにある。「愛する者よ、あなたはきょうだいたち、しかもよそから来た人たちに誠実を尽くしています。」

そしてこの「誠実」も、旧約聖書で既に主張されている人間の徳である。旧約聖書で「誠実」と訳されている主なヘブライ語は、エメトとヘセドである(他にも、タームやシャレームなどもある)。

エメトは、「誠実」の他に「真実」とも訳される¹⁵。エレミヤ書10章10節に「主は真実(エメト)の神、命の神、永遠の王」とあるように、「誠実(真実)」は、前述の「愛」と同じように、何よりもまず、神の性質である。それゆえに、人間にも「誠実(真実)」が求められる。ヨシュア記24章14節には、次のようにある。「今こそ、あなたがたは主を畏れ、真心と真実(エメト)をもって主に仕えなさい」(サムエル記上12:24も参照)。そして、重要な任務に就く人物の条件の一つは、「誠実な人」である。出エジプト記18章21節には、次のようにある。「それからあなたは、すべての民の中から有能な人、神を畏れる人、誠実(エメト)な人、不正な利益を憎む人を選び出し、千人隊の長、百人隊の長、五十人隊の長、十人隊の長として民の上に立てなさい。」そして、ダビデ(列王記上3:6)やヒゼキヤ(歴代誌下31:20)やハナンヤ(ネヘミヤ記7:2)などは、「誠実(真実)」

な人であると賞賛されている。一方、預言者ホセアは、彼の時代に「真実」や「慈しみ」がないとして、非難している。ホセア書4章1節には、次のようにある。「この地に住む者を主は告発する。この地には真実(エメト)も慈しみ(ヘセド)もなく、神を知ることもないからだ。」

「誠実」を意味するもう一つのヘブライ語は、ヘセドである。ヘセドは、前述のように「愛」をも意味する語である。また、ホセア書4章1節のように、「慈しみ」と訳される場合もある。夙川学院短期大学の教育理念の第一項目は「愛と誠実」であるが、旧約聖書のヘブライ語のヘセドは、この両方の意味をカバーする語である。前述のホセア書4章1節で「真実」と訳された語エメトは「誠実」とも訳すことができ、ヘセドは「愛」とも訳すことができる。従って、ここでホセアが大切なこととして主張しているのは、「誠実」と「愛」であると言うことができる。いずれにしても、旧約聖書において、「愛」と「誠実」は、人間の生において最も大切なこととして主張されている、と言うことができる。

創世記21章23節において、アビメレクはアブラハムと交渉する際に、「誠実(ヘセド)」を誓って下さいと言っているが、人間が交渉する際に最も重要なのは「誠実」と言うことであろう。また、ルツ記3章10節で、ボアズはルツの態度を評価して「あなたの誠実(ヘセド)は尊い」と言っているが、尊重される人物は「誠実」な人である。また、エレミヤ書2章2節で「私はあなたの若い頃の誠実(ヘセド)を、花嫁の時の愛(アハバー)を、蒔かれない地、荒れ野で、あなたが私に従って来たことを覚えている」と言われているが、イスラエルの初期時代は、神に対して「誠実」と「愛」を尽くしていた、と評価しているのである。また、ホセア書6章6節には、「私が喜ぶのは慈しみ(ヘセド)であって、いけにえではない。神を知ることであって、焼き尽くすいけにえではない」と言われているが、神が喜ぶのは、豪華な献げ物をささげるのではなく、ヘセド(愛、誠実、慈しみ)だ、というのである。

また、ミカ書6章8節には、次のようにある。「人よ、何が善であるのか。そして、主は何をあなたに求めておられるか。それは公正を行い、慈しみ(ヘセド)を愛し、へりくだって、あなたの神と歩むことである。」ここでも人間の生において最も重要なこととしてヘセド(愛、誠実、慈しみ)が挙げられて

¹⁴ *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*(ed. By Walter Bauer) (The University of Chicago Press) のピスティスの項目参照。

¹⁵ *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon*(Hendrickson Publishers)のエメトの項目参照。

いる。

3. 終わりに

質の高い保育者を世に送り出すことを目指している夙川学院短期大学の課題は、前述したイエス・キリストの教えの中心であり、既に旧約聖書でその大切さが主張されていた「愛と誠実」という徳を身につけた質の高い教育者を世に送り出すことによって、社会に貢献することではなからうか。

本学の「キリスト教学」の授業においては、「イエスの教え」という項目があり、そこでイエスの重要な教えとして、「愛と誠実」につて触れている。また、旧約聖書の項目においても、神が愛を持って人間を創造されたこと、人間はその愛に誠実に応えるべき存在であることなどに触れている。

また、週2回行われている「礼拝」においては、聖書の話をしているが、そのなかで、「愛」や「誠実」をテーマにした話もしている。

本学の学生が「キリスト教学」の授業と礼拝において、本学の教育理念である「愛と誠実」を少しでも身につけ、教育の現場に生かしていくことを期待している。

4. 引用文献・参考文献

- 1) 夙川学院九十年史編集委員会編『夙川学院九十年史』学校法人夙川学院、1971年。
- 2) 夙川学院百年史編集委員会編『夙川学院百年史』学校法人夙川学院、1986年。
- 3) A・ベルレユング、C・フレーフェル編『旧約新約聖書神学事典』山吉智久訳、教文館、2016年。
- 4) 『新聖書大辞典』キリスト新聞社、1971年。
- 5) Koehler, L. and Baumgartner, W., *The Hebrew & Aramaic Lexicon of the Old Testament*. Brill, 1994.
- 6) Bauer, Walter, *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*. The University of Chicago Press, 1957.
- 7) *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon*. Hendrickson Publishers, 1906.

ピアスーパーバイザーからのコメント

聖書全体において、最も重要であるとイエスが主張したのは「心から神を愛する」とことと「自分のよ

うに隣人を愛する」ということである。

「愛と誠実」という徳を身につけることの重要性を、筆者は論じている。また、このような徳を身につけた保育者・教育者を養成することが大切であると述べている。

そして、このような徳を身につけられるように本学では、キリスト教学の講義が展開されている。このような授業を通して、本学の学生が徳を身につけて保育者として活躍できるよう期待したい。

(担当：林幹士)